

室生犀星

芥川龍之介氏の  
人と作



芥川龍之介氏の人と作



## 一 彼、人

芥川龍之介か佐藤春夫の孰方の碎けた評論めいた人物  
印象を大部のものに書いて貰えないだろうか、そういう  
中村武羅夫氏からの依頼を聞いて、自分は佐藤春夫は万  
年青年であるし今ちよつと書く気がしないし適當とは思  
えない、芥川龍之介はまだ料理したことのない鯪のよう  
なもので、自分の狙に乗るかどうかは疑わしい、自分は

むしろ秋聲先生に狙の上に乗って戴こうと思うのであるが、中村武羅夫は是非芥川龍之介論の方をと言い、自分もその気になり引受けたのである。

一体芥川龍之介論とは何の事だろう。自分は不意に演説を指摘されたようにまごつく、——芥川龍之介という小説家を君は知っているかね、田端にいるんだが会ったら面白いかも知れんよ、そう云うたのは今から十年前の萩原朔太郎であった。此間詩集を送ったら手紙を呉れたが今度帰京したら会って見たらどうかと、彼の故郷前橋で私の最も親懇な萩原の口から、印刷にならない芥川龍

之介という名前を初めて聞いたのである。併し私は彼の前に当時の意気軒昂の概を示しちよつと胸を反らし乍ら云ったものであった。「小説家に態々わざわざこちらから訪ねて行くのも不見識ではないか、我々はそういうことまでして交際をする必要がない。」萩原は当時既に谷崎潤一郎を知っていたし、何かの紛れにも能く此谷崎潤一郎という拓本のような名前の感じを、私の前に話していた矢先で少々私は胸くそもので小癩に障っていた。私はといえど交友に有名な男がなく其意味で萩原は既に一家の交誼的な周囲を有って些か私に当たったものであった。「一体

小説家というものは気に食わん」私はともすると議論めいて来る彼の鋒先を避け乍ら、小説家というものを目の敵にしていたので、芥川龍之介なぞに会うもんかと思うのであった。

自分が初めて芥川に会ったのは日夏耿之介の詩集の出版記念会であった。円卓の向うに自分は紹介された芥川の顔を見ると、直ぐ此種の端正な顔貌自身から来る引身を、逆に何か苦手な気の合わない人間のような気がした。が、其帰り途に一緒に歩き乍ら色々話をすると、楽な親しみ易い打解けたところのある、寧ろ砕けた人のように



思われた。その翌々日だったか彼の書齋を背景にして、  
る彼を見て、処狭いまでの書物の堆積や談論の自在な彼  
を打眺めて、戯談まじりの話をしながらも却て帰途はそ  
れにも拘らずひどく陰鬱な気持であった。今から思うと  
自分は彼に抵抗する精神的武器がなかったらしく、それ  
が自分になればあんなに陰鬱に考え込まなかったである  
う。何を言っても自分はまだ市井破垣を結ぶの一詩人で  
あった。しかも一詩人の威力を打通すだけのものが自分  
の胸中を貫いていなかった。それに幸か不幸か芥川は余  
りに自分の前であけすけに話をしてくれたのが、一際自

分を陰気にしたのだろうと思われている。人間は時に屢々自分以下のものには楽に砕けることを愉快に念うものだが、彼の砕け方はその気持の上で種類が違っているようだった。対手を窮屈がらせない一種の座談に慣れることに抛って、為されたそれのようにも思われた。当時の世間知らずであり文壇めくらであった私が、彼と対坐しただけで遺憾ながら彼を自分以上のものであると云う、心からの承認では無かったとは云え、おもむ徐ろにその臆気なものを感じたことは拒めなかった。自分は春夫が最初谷崎を嫉視した気持を、今から思えば多分に雑えていたの

である。有名に対抗する故なき嫉視と憤怒に似たものを白面一介の彼に感じたことは、私のこれまでの生涯に於て北原白秋と同様のものであった。北原白秋に会った最初は二十二歳だっただけに、羽根が立たぬような自分でもあったからいいとしても、彼の場合には自分は既<sup>も</sup>う二十九にもなっていたから、刺戟や圧迫などと云う生優しいものではなかった。自らを鞭打つ激情に似たものを彼から感じたのだった。自分は三四回目に出会った時は「幼年時代」という小説をひそかに家において書いて、彼にその話をして、見てくれるかどうかという意味を、恰

もお世辞に似た心からでない曖昧な気持で彼に述べたが、彼は一寸慌てたようにいや僕の如きは何とか言い、すぐその話は素早くよそに逸れてしまった。その時自分に応酬する彼が談偶々小説に及んだことで、彼の面にかすかな迷惑らしいものが掠めたことを自分は感じた。(後に考えると彼の当惑らしい表情はだしぬけに云った自分に感じたのは当然であつたが、その当惑の戸を叩きこわすことのできない自分だつたことにも気がついていた。人間は時に屢々自分を叩き上げるために相手の当惑の戸を叩きこわさなければならぬものだ。自分はあの時この

友の当惑を絞め上げて置いたら、彼とは別な意味で種々のものを摂取できたろうと思つた。）

その後自分は彼をたずねたが最初に受けた印象は滌かわらなかつた。その日の都合でいい加減なことを云う男でないことが判つた。唯、彼の物の云い方に或高飛車があり、それが彼の場合非常に自然に受取れるのが不思議である。おもに批評的になる話題にそれがあった。——ずつと後、震災後金沢へ来た時に或老俳人の前で、彼は北拔の句のことなどを土地柄であるとは云え話し出したりした。後で私の畏敬する老俳人は芥川という人物に感心し

て、金沢へ度々人も来たが、あれほど若くてしつかりしている男は初めてだと感服していた。自分はその時も紹介甲斐のある点で、彼の人物を釈明する必要がなかった。しかも老俳人はまだ彼の一作をも読破していなかったのである。

自分に彼を紹介した萩原朔太郎が上京して田端に住むころには、却て芥川に萩原を紹介するような顛倒した位置と役目に私はいた。萩原は芥川に会えば議論もするらしいが、私と萩原と趣味が一致しないように、芥川と私との生活振りは全然違ったものだった。一緒に旅行して

いても私は晩は九時から十時に寝に就き、彼は夜中の二時三時というのに煙草のけむりの中に起き上り何か書いている。私が朝の散歩から戻って来て仕事に取りかかる頃は、彼は漸つとむずむずと床から起きるのであった。彼は少く軟かい物を食い、私は多く固いものが好きだった。彼は手当り次第に読み私は嫌いな物は一切読まなかった。彼は滅多に人見知りを露骨に色に現わさない東京人であるのに、私はがりがりした露わな田舎人の粗暴と人見知りを持っていた。彼は話好きで夜更しを平気で遣り私はその反対の方の人間であった。彼は芭蕉を五年も

さきに読み上げ一と通り卒業していたが、私はやっと此二三年身を入れて読み出す位だった。唯一つ陶器だけは一步先きなくらいで何事も私のよくつかう文字であるが残念乍ら先きに歩いていた。全く残念乍ら！ 人は芥川龍之介の有名に反感はもつとしても、彼の人物にはそういうものを持つことはできぬであろうと今でも思っている。



## 二 文人

龍之介は数十句の発句を窃かに筐底に秘蔵している。

龍之介の自ら元禄の古詞になろうている所以のものは、単に古きしらべに従っているのではなく、巍然たる元禄の流れを汲んでいるのである。碧梧桐以後に幾度となく波濶重畳した俳壇の諸公から見れば、彼の発句は一見陳套の嘲を買うかも知れない、今更ら蕉風に低迷しなくともよいではないかと、彼等の内の精英は言うかも知れぬ。しかしながら併し乍龍之介のねらいは元禄諸家の古調や丈草去来のさ

びしおりを学んでいる訳では無い。ただ叮嚀に蕉風のねらいを今人の彼が心に宿しているだけである。彼は元禄人が引いた弓づるをその的を最と強く引いているに過ぎない。

今の文壇に文人の風格を持っているものは永井荷風を別格としたら先ず漱石以来では芥川龍之介や志賀直哉であろう。彼が発句を詠み書画骨董の鑑識を有っていると云うだけで文人だというのはない、心から文人の好みを持っているからである。氣質が既に縹渺や古実や詩情を交せて宿していることだ。芥川はその古さの中に新し

さを搜る鋭い爪を有っている。芥川の爪は時に閑暇を得るときに木の肌や人事の縹渺の中に搔き立てられている、鷲や鷹の爪ではなく、黒鷹のような精悍さを有ち合っているようである。

龍之介の発句を無用の長物であるという俳壇の古武士があるだろう。彼等を思うとき此無用の長物をも併せ思わねばならぬとしたら、また彼等が均しく芸術の士として後世の筆端に煩わされるとしたら、先ず此無用の長物をも見遁さないであろう、彼等を見る上に之等の詩や発句は有益の文字であることを、後世の輩は感じるかも知

れない。

夏目漱石は完全な渾一された好個の文人であった。あらゆる意味での文人の心意気や典型を有っていた。漱石を文人の外のものとして考えたくない程の、彼をあげつら論う上の必要の文人だった。だが泡鳴を文人だということはできない。詩をも書いた彼を文人として曲指するに躊躇するのは、がらと質とに何か叛いた文人以外の気持が混っているからであった。漱石の文人的なるものの感化はまだ金釦を胸に飾っていたころの芥川にあったのは当然のことである。又或は進んで漱石の感化裡に飛び込んで

いたかも知れない、併し彼はそのままでは決して頂戴はしなかった。彼は彼らしく修正し補足したにちがいない、——その証拠にはあれ程大文人であった漱石の発句は、折々光ったものを見せてはいるものの全幅に枯寂の俤を欠いているばかりではなく、遺さなくともよい程の拙い句を残していることを考えると、漱石は悪い句も棄てなかつたらしく思われる。或は句集編纂者がでたらめに蒐集したのかも知れないが、ともあれ彼ほどの大家の発句として残さずともよい句が可成りに多数に上っているのは、漱石が棄てなかつたことに原因している。あらゆる

発句は棄てなければならぬ。心残りなく棄てなければならぬ、——その意味で吾が龍之介は棄てることの名人であつた。或は彼は発句を棄てることに於てより多く名人であつたかも知れなかつた。彼の潔癖ときぎずものを厭う氣持がそうさせたことは勿論であるが、何よりも彼は棄てることに於て元禄の芭蕉を学んだのかも知れぬ。

紅葉の句の拙いことは鏡花にまで影響していることは、彼等には巍然たる山脈の光芒を握っていないからであつた。漱石は子規時代の何人も其様であつた如く天明の豪邁な調子に乗り合っていた。子規が蕪村を出られず

漱石が子規の間を彷徨していたことも為方のないことであつた。何故彼等が一足飛びに元禄の豊饒な畑に種子を拾い得なかつたかと言え、彼等の時勢が天明調以外に芭蕉の光輝すら幽かに漏れる夜半の明りほどにも、頼りない仄かなものであるらしかつた。その時勢は芭蕉すらも月並という言葉の中にあしらわれていた時勢だからである。

### 三 流行とは

芥川龍之介は宜い加減なものを書いてよいときにさえ、（若し恚<sup>こ</sup>う云う言葉があれば、又仮りに彼にそういう機会があつたとしても）嘗てその手綱を弛めたことがない、焦らずゆっくりと作家としての峠にいる彼である。世に出たときにさえ谷崎潤一郎のような烈しい喝采を博した訳ではない、少しずつの読者を年々に堅めつけ年とともに数を殖してゆくような彼である。浮薄な読者の間に忘れてゆくそれではなく、彼を読むものはそのまま



彼のまわりに何時までも群れ寄っている。「芋粥」から「玄鶴山房」まで余り読者は渝かわらないようである。こういう作家というものは稀にしか無い、これは彼の人徳ではなく彼の堅め付け方が信じられているからである。昨日の読者は今日の読者ではなく、読者は作家の二倍くらいの速力で進みもし先きにもいるものだ。それを彼は知らん顔で踏まえ留めていることは、地味なしかも渝らない不断の流行を擔うている所以であろう。すくなくとも読者の心に信じられているからだ。

谷崎潤一郎や里見淳の人氣には能く觀ればまだ浮いた

人気がないでもない。彼等は明るくて常に一種の「華美」な雰囲気の中にいるからである。併乍、志賀直哉や芥川龍之介や徳田秋聲には浮いた人気は終熄している。それは人気以上のもので人気と名づけられない単にいい作家とだけ称うべきものかも知れぬ。——彼、芥川龍之介の場合はいい加減な作を作らない所以、彼の苦渋が彼を何時までも揺がせない。強いて云えば小憎らしい不断の流るを負うに原因しているかも知れぬ。自分の如きは求められるままに濫乱の作を市に抛つに急であつたために、今日の「我」をして悲しみを大ならしめた所以だが、人

は志を更めるに恥を知るものではない。彼、龍之介の今日あるは又自分の大いに学ばねばならぬものだと思つてゐる。語を換えれば彼ばかりの場合でなく一国一城の各作家の弓矢や楯や兵法や築城には、それぞれに学びそれぞれに教わらねばならないものの多くを自分は感じてゐる。分けても彼の氣鋭は「羅生門」「芋粥」の時代から何時も同じい芥川龍之介の地盤を固めている。未定稿のまま「大導寺信輔」を書いた頃から作を絶つていたものの、却て今年になつてからぐつと伸び上つてゐる。何時も燃えるような拍手喝采のそれではなく、何時も何か彼

は読者との間に信じられているようである。

#### 四 詩的精神

詩のある文章や小説というものに冷笑を感じていることは、久しい間の自分の偏屈な而も誠実な習慣であった。詩のある小説とは美しくだらだらと宜い加減の文章の綾や曲折を綴り合うたものだとしたら、又世の批評家諸公の謂うところのものであつたら、自分は彼等に根本的に詩を説明してかからなければならぬ手数と厄介さを

感じるだけである。

詩的なるものとは文章の表面ではなく、行と行の間字と字の間に、たなびく縹渺たる作者の呼吸づかいや気魄や必逼的なものを云うのだ。芥川の文章の中にいつも此縹渺たる何物かがあるのは、諸君の知悉せらるるところであろう。志賀直哉は実に際どいところまで行くが、いつも清らかで美しい。「暗夜行路」や「紅い帯」其他女中を書いたものにそれがある。併乍芥川の脈々たる縹渺が無い。芥川はいつも何か青い煙を感じる程度の、彼自身の記事のような気魄や肉体を有っている。「枯野抄」

の縹渺は今から彼自身が見ても、枯寂な一個の魂に対する詠嘆としか思われまいであろう。彼は十分な縹渺や枯寂を「枯野抄」では表し得なかつたと云つてよい。去来丈草の諸門弟を一々描いただけで、それだけの彼のねらいが余りに「その空気」を表わすに道具立が多かつたと云つても過言では無かろう。併乍大正四年代に悠々として「羅生門」を書き、越えて七年に「枯寂」な「枯野抄」を描こうとした彼の用意は並一通りのものではない。彼は実に楽しみながら古実から新鮮を掘り当てている。或は彼は彼自身楽しく書いていないと云うかも知れぬ。何

人も作者は苦吟するが故に愉しんでいないと云うのが眞実かも知れぬが、併し苦吟し乍ら愉しんでいないとは云えない。「藪の中」にすら彼自身愉しみ乍ら運命のはらわたを搔きさぐっている。彼の作の凡てがそうのように此作も横縦から油断のない手法で矢継早やに固めている。而も此中の女の美しさは異常なまでに感じられるのは、<sup>あなが</sup>強ち物語の稍々うがち過ぎたためでは無かろう。何よりも彼は前人未到的な物語風なものに凝ったのも、彼の唯一の好みばかりでなく彼の聡明な文学的発足点であつたのであろう。そして此種の物語風な作品は不

思議に今から思うと、大正文壇の記録的な作品の種類に這入っている。再びああいう種類の作品は我々に必要のない程度までの、それ程肝腎な一小説体を為していることは特記してよい。自然主義以来芸術的な物語風の小説としては、彼の諸作品は重きを為すことは当然である。

彼は最近物語風なものから脱けようとするほど、彼の文学的過去に於て物語の作家であつた。どういふ作品も物語の範囲は出ていない、それ故何時読んでも退屈を感じない文字通りの小説的效果を讀者は受け味うことができるのだ。彼が可成り高踏的な作家であり乍らも、



なお通俗的な所以のものは一つには此物語風の姿を有っていることであり、話と筋とが透っているためであろう。

そして此種の作品が後世の識者を問うとしたら好個の「記録的な作品」として評価されるに違いない。

今の文壇で漱石鷗外のあとを継ぐもの、彼ら以外の大作家として残るものは何人であるか分らない、併し我々の頭を去来するものは残念乍ら芥川か志賀かその孰方かであろう。谷崎は国宝的作家であろうが、漱石鷗外と併称さるべきものではない。国家は稀れに取止めもない建築や器物に国宝の冠を与えると一般的なものを、我々は谷崎

潤一郎に感じることも無いでもない。しかも今は何となく大谷崎の大の字を与えられる作家は、芥川や志賀ではなく、実に大谷崎潤一郎である。併乍、漱石鷗外の後継的気分を我々の文学的炉辺にしばしば語られ醸すところのものは、龍之介と直哉でなければならぬ。

## 五 自分と彼

自分と彼とは僅か七八年くらいの交際に過ぎない。しかも其間に自分は彼から種々なものを盗み又摂り入れた

ことは実際である。彼は残念乍ら一步ずつ先きに歩いているからである、或は一步どころではなく十歩くらい先方を歩いてきたかも知れぬ。或は田舎生れの弁で用途を満している牴牾かしさを、東京に生れた彼が東京弁で用を弁じている速力の相違であつたかも知れぬ。

萩原朔太郎が此間室生犀星論を三十枚ばかり書いて久潤を叙する意味で自分に示して呉れた。自分の市井生活の荒唐無稽を露骨なまでに曝き、「この頃の取澄した」自分を粉碎し又理解した文章であつた。その中に私と芥川とを批評して恁ういう意味のことを云っている。「彼

が芥川龍之介と知り合い彼等が均しく慇懃であるのは、兼て室生が欲しているところの教養あり、典雅な人物に彼が行き会うたからである。彼自身の中に潜んでいる当然典雅なるべき彼を築き上げたい夢想を、次第に彼は芥川を知ってから実現し出したようである。少くとも当然彼の中で睡っていて起きないものまでをも、芥川龍之介なる人物に刺戟されて揺り起されたと云っても過言ではなからう。」と云っている。彼の言葉を藉れば教養ある高雅の人物を私は永い間望んでいた。そしてその人物に邂逅したことは彼の気質からなる風雅なるものを、一層

建て直したと云ってよいという論旨であつた。自分は萩原の云うところに不賛成ではない、寧ろ彼は離れている間にも彼の友である私を遠く注意深く睨んでいることは、彼の唯一の友であるが故に頼母しい気がしたくらいである。

菊池寛の言葉を藉れば芥川龍之介は人がいいそうである。彼に逢つたどういふ人も彼を悪く云うことを聞いた事がない。会わない前から見れば会つてよかつたという懐しさを感じさせるらしい。そこが彼の人のいい、隠し立をしない人がらであるかも知れぬ。彼の上機嫌は彼を

長広舌にさせる事は暫く擱いても、彼は妙な人見知りや  
気取りや故意とらしい気障から夙に卒業していることは  
実際である。人間が出来上ることは人見知りや気取りの  
必要のないことであろう。しかも彼は皮肉でなく正直に  
云っている。「僕は誰とでも或程度までは交際えるが、  
その或程度までで又引歸して来る。」と彼らしい気持の  
手堅さを見せている。こういうところは人が善いのだか  
悪いのだか分らない、或は或意味で菊池寛の方がよほど  
彼よりも人がいいのかも知れぬ。

一概に萩原の所謂「典雅なる人物」との邂逅に依って、

自分の全幅が影響されていると云うのや、彼に依って初めて自分が揺り起された訳ではない。彼に據ってほんの少しずつ自分は彼のものを盗んだ丈である。彼の中にあるもので自分に取って解らなかつたものが解るようになってきたことは、或意味で重大なことも知れない。とにかく彼は却々なかなかなかの苦勞人である。しかも彼の苦勞人の所以のものは妙に垢じみた薄暗いそれではなく、明るい冬の朝のようなそれである。彼は学問や経験の上からも、自分とは全然反対であるが、しかも彼は経験せずして経験する程度のもを直覚する男である。彼は或意味で世間的

に云えば恐るべき早熟だとも云えるのである。或は彼があれだけの才能を不良性そのまま駆り立てていたら、どうにもならぬ人間になつたろうと思える程である。恚ういうことは礼を失するかも知れぬが、彼が不良の徒だとしたら才気喚発で一世を震撼させるかも知れない。







日本文学電子図書館

---

芥川龍之介氏の人と作

著 者：室生犀星

制作者：宮澤一郎

底 本：「芥川龍之介の人と作 上」  
三笠書房

昭和18年4月15日 初版印刷

昭和18年4月20日 初版発行

日本文学電子図書館